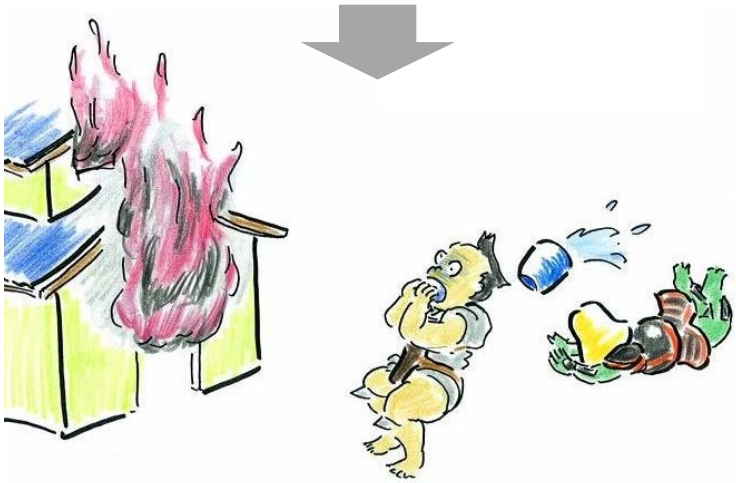
支援くんの火災予防奮闘記

これまでのあらすじ

物語を読む前にまずご覧ください。

物語の主人公 支援くんは「市民家」の火災予防を司る妖精です。

家来の中間（ちゅうげん） ご助と火災予防の点検を行うのですが、まじめな支援くんに比べ、あまり仕事に熱心じゃないご助の点検はいつも問題ばかりで、時に大きな事故まで起きてしまいます。



そんなご助に手を焼きながら、火災の予防を行う支援くんたちの姿は、普通の人には見えない筈なのですが、今年５歳になる市民家の長女 援(えん)ちゃん には何故か二人の姿が見えるようになったのでした。

点得(てんとく)幼稚園の年中さんの援ちゃんは、二人と遊ぶのがだぁーい好き。

でも、援ちゃんの好奇心が大きな事件を引き起こすこともあります。

ご助と援ちゃんに振り回され、苦労の絶えない支援くんの

火災予防奮闘記 をどうぞご覧ください。

支援くんの火災予防奮闘記

～火災を起こさないために～

Vol.35

「おやおや、もうそろそろ衣替えの季節じゃのぉ。」と、通りを歩く詰襟姿の学生を見ながら拙者が言うと

「旦那様、何を悠長な。確かに巷では衣替えの季節でしょうが、あっしらは年がら年中同じ衣装で衣替えなどねえじゃねぇですかい。」と言い放つと

「それでも旦那様はまだ良い方ですぜ、甲冑の下には具足下（ぐそくした）（意：鎧の下の衣）をお召しじゃねぇですか。あっしなんか真冬でも単衣（ひとえ）に下帯、下帯だけですぜ。まったく、腹が冷えるとかって話じゃねぇですぜ。」と続けたご助はさらに、

「ちっ」と舌打ちしながら

「もうまもなく、あの寒い冬が来るかと思うと、ぞっとして・・・おお、見て下せぇ尻が凍えて・・・。鳥肌じゃ、いっそのこと羽毛でも生えてきて欲しいもんだ。」と悪態をついたのじゃった。

「背筋が凍ると言うのは聞くことはあるが、おおよそ寒いからといって尻が凍るとは使うものではあるまい、余りにも下品な表現じゃな。それにしても最近のおのれの日本語は乱れる一方じゃ、嘆かわしいのぉ。」と拙者が注意すると、

「な、なんでぇ、あっしだって、ことわざの一つや二つくらい知ってますぜチクショーめ、少しばかり学があるからって威張り腐って・・・」と叫ぶと、ご助の奴め急に両手で自分の口を覆い

「うぐぐぐ・・・い、いけねぇ、いけねぇ、また旦那様に悪口をきいちまったぜ、人の悪口は言うもんじゃねぇ、金輪際言わねぇ、って誓ったばかりだっていうのに」とうつむいたのじゃった。

いつもらしくない　ご助の言動を怪訝(けげん)に思った拙者は、

「らしくないのぉ・・・おのれから悪口を取ったらちょん髷を結った馬鹿面しか残らんではないか。」と水をむけたのじゃが、

「て、てやんでぇ、おっとっとぉ、その手は食いやせんぜ。あっしはもう悪口は言いませんぜ。悪口を言えば、それ、正岡の子規様がおっしゃてるじゃねぇですか。『柿食えば唇寒し秋の風』ってね。」と訳の分からん俳句を口にすると

「あれでやしょ？この句は悪口を言ってしまい、バツがわるくなって唇が寒くなるって塩梅の句でやしょ？」と自慢げに続けるのじゃった。

「待て待て、どこの世界に柿を食いながら悪口を言う者がおる。だいたい、子規殿の句は

『柿食えば鐘がなるなり法隆寺』じゃ。意味はのぉ、『柿を食っておったら法隆寺の鐘が聞こえてきた、その音を聞きながら深まる秋を感じたものよ』という句じゃが・・・。

・・・ははぁん。もしかしたら、おのれの言いたかったのは『物言えば唇寒し秋の風』じゃな？人の悪口を言うと後味が悪くなるのたとえじゃ。こちらなら成程おのれの言うとおりじゃと褒めて遣わしたものを知ったかぶりで朗々と喋るもんじゃから、ほれ鏡を見て見い、唇が真っ青じゃぞ。」と指摘すると

「ほ、本当ですかい？や、やっぱり悪口のたたりなんですかい？」と言うと言葉を失ったように立ち尽くすのじゃった。

「ど、どうしたのじゃ、だんまりか？　張り合いの無い奴じゃな。いつものように思う存分、悪口を続けたらどうじゃ？」と申したのじゃが、青い顔のご助は黙りこくったままじゃった。

シーン・・・と不気味なほどの静寂が２分ほど続いたかとおもうと、次の瞬間、

「プッ、プハーッ」と顔色を青から赤に変え、ご助が息を吐きだしのじゃった。

その様子に驚いた拙者が

「ど、どうした？どこか悪いのか？」と尋ねると

「はあはあ、い、いえね、隣の一平様んところのご助が唇が荒れたと騒いでおりましたもので・・・。」

と答えるご助に「？？なんじゃそれは？」と重ねて尋ねると

「へへ、えーっとですね、一平様のところのご助の話なんでやすがね、こいつときたら、寄合いの席でやたらと主家の悪口を言うんでさ。それで唇寒しの罰(ばち)でやすかね、唇が荒れて大変なことになってるんでさ。」

「ほ、ほおぉ・・・で、それと、おのれが呼吸を止めることになんの関係があるのじゃ？」と問いただすと

「へ？い、いえ・・・そう大したことじゃねぇですよ。」と慌てるご助に

「どうした？大したことがないなら話しても構わんじゃろ？申してみよ。」と命じますと

「き、聞きたいんで？旦那様？」と口ごもるご助に

「うん？おお、聞きたいのぉ、申せ。」と更に命じましたところ

「ど、どうなっても知りやせんぜ。」と上目遣いで拙者を見るご助に

「ええい、勿体ぶるな！一体全体何じゃと言うのじゃ？」と拙者は声を荒げるのと同時に、意を決したご助が

「あっしにもあるんでさ。」と叫びましたのじゃ。

「あっしにも？何が？何があるというのじゃ？」とキョトンとして拙者が聞き返しますと、

「くっ、か、勘の悪いお方じゃ。」と吐き捨てるご助に対して

「な、何じゃと！？」と気色ばむ拙者。

拙者の怒りを悟ったご助は

「し、仕方ありませんな、あっしの唇も、ほれ！・・・荒れておりましょう？」と唇の内側を拙者に向けたのじゃった。

「う、うわぁ、い、痛そうじゃな・・・。一体どうしたというのじゃ？」と言ってから、拙者はハッと気づいたのじゃ・・・

「ま、まさかと思うが、おのれも一平殿の所のご助と一緒になって、主様や拙者の？」と問いただすと、ご助は叱られた犬のように上目遣いのままコクリと頷いたのじゃった。

「お、おのれという奴は、そ、そこに直れ！おのれの唇の傷み具合を見れば、おのれの日ごろの罵詈雑言がいかばかりか火を見るよりあきらかじゃ！拙者が名槍、加賀丸で串刺しにしてくれよう！」というと、タタタッと床の間へ走るや、鴨居に架した先祖伝来の名槍『加賀丸』を両の手でグッと押し戴けば・・・押し戴けば・・・。

「？？ な、無い！拙者の加賀丸が？無いぞ！儂の加賀丸は？？」と、大声をあげ振り返りかえった拙者は、尻もちを付きながらジリジリと後ずさるご助を見とがめ

「ご、ご助！加賀丸をどうしたのじゃぁ！」　と、更に大声でご助を詰問したのじゃ。

「ひいいぃっ」と悲鳴をあげ逃げるご助

「逃がすかっ」とその襟首をムンズっと掴むと

「わ、悪いのは、ひ、姫様ですぅ・・・あ、あっしは止めましょうと申し上げたんですぜ・・・」と手足をばたつかせながら叫ぶご助に、

「な、何をしたんじゃ？」と更に問いただすと

「あ、秋祭りの棒振りでさ・・・」とご助。

「秋祭りの・・・棒振り？・・・青年団の獅子舞のか？」と聞くと

「へ、へえ・・・」と答えるご助に、

「確かに先週は、獅子舞があったわな。その獅子舞の棒振りと拙者の『加賀丸』がどう関係するのじゃ。」

「ひ、姫様が棒振りをしたいとおっしゃって・・・」

「姫様が・・・棒振りを？おお、確かに薙刀を振っておいでたな。」

「そ、そうですじゃ・・・あ、あれが『加賀丸』ですじゃ。」

「・・・・・あん？何を申しておる？拙者は槍の話をしておるのじゃぞ？何で薙刀の話になるのじゃ？」

「ひ、姫様が・・・潰したんでさ・・・。」

「あん？」

「で、ですから、姫様が槍の穂先を潰して薙刀にしたんでさ・・・。」

「？？？・・・な～にぃっ、焼いちまったかっ？」

「だ、旦那様、それはクールポコですぜ。」

「ば、馬鹿者めっ！なにがクールポコじゃ！家宝の槍を・・・お、おのれは何故お止めしなかったのじゃぁ！！」

「し、しましたよ。お止めしたんですが、あっしがお声を掛けた時には、『加賀丸』はガスレンジで穂先を真っ赤に焼かれてたんでさ。」

「ひ、姫様が、ガ、ガスレンジで焼いておったのか？何でそのような知恵が？」

「へ、へえ、秋祭りの前の日、NHKのテレビで『刀匠、隅谷正峯』ってのがやってたんでさ。それを見て『えんちゃんも刀匠になる。』っておっしゃって・・・それであれでさ。」

「うぬぬぬぬ・・・クソガキが！ な、何と危ないことを！し、しかしレンジは？お屋敷のガスレンジは安全装置付きじゃろうが！真っ赤になるまで燃焼しないじゃろうが？」

「た、確かに温度センサーが２７０度以上になれば炎はきえやすが、姫様はそれを知っておいでで、ヤカンを掛けセンサーが働かないようにして穂先を焼いたんでさ。」

「何でじゃ？何であのクソガキがそんなことを知っておるのじゃ？」と拙者が叫ぶと

「だ、旦那様、旦那様は先月のサツマイモ収穫のあと、歯の欠けた鍬の修理をしましたな。」

「欠けた鍬の・・・？おっ、確かにした。あの時はレンジの炎が消えぬように・・・ヤカンに水を張ってじゃな、ああっ？せ、拙者か？拙者があのクソガキに教えていたのか？」

「だ、旦那様・・・クソガキ、クソガキって口が過ぎますぜ。」

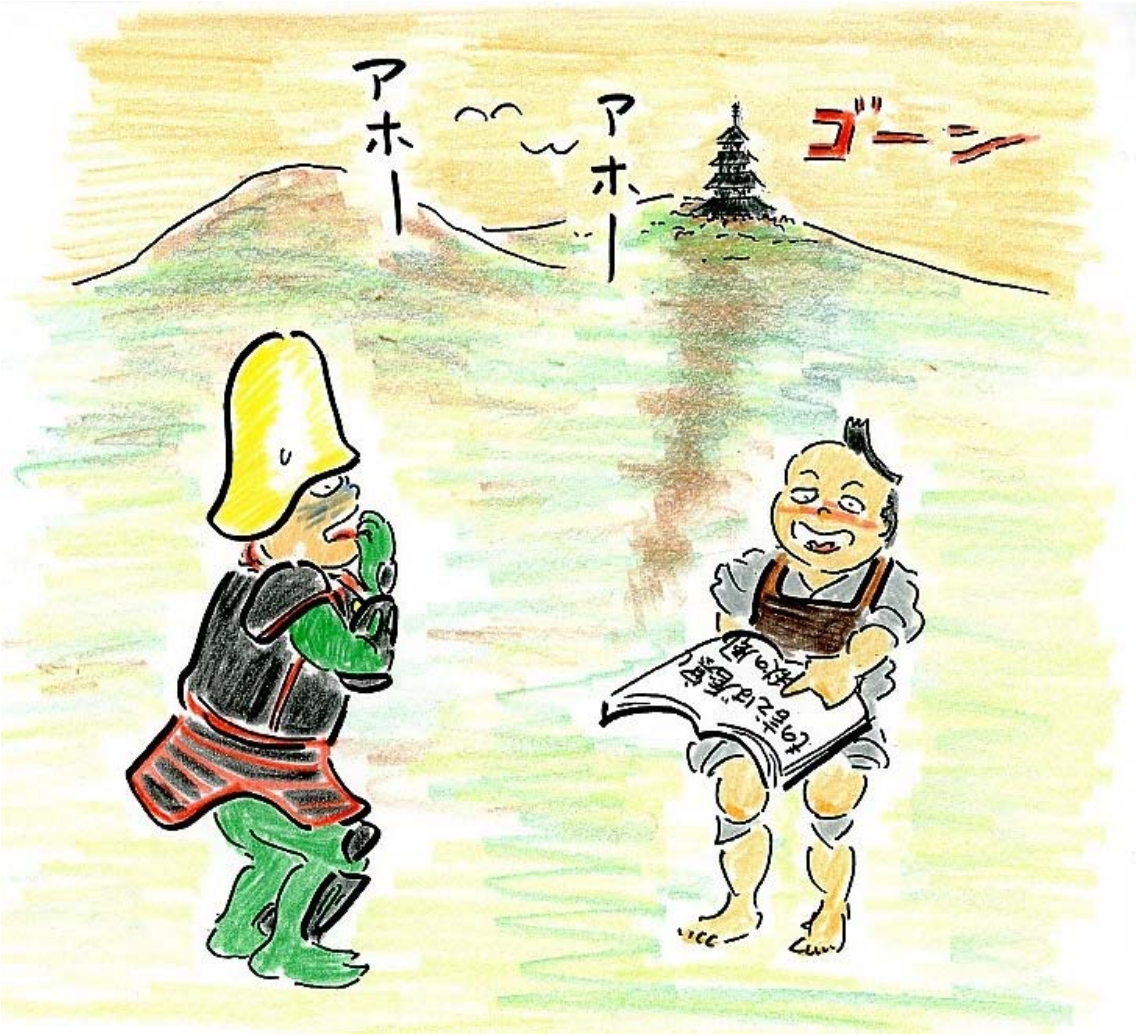
「たわけがっ、クソガキをクソガキと言って誰にはばかることがある！」と叫んだところへ

「クソガキっちぇ、だりのことじゃ？」と幼稚園から帰った姫様が現れたのじゃ。

「あっ、クソガキ、いや、ひ、姫様・・・」と叫んだ刹那、拙者は「あ痛た、く、唇が！」と己の口を押さえたのじゃった。

「だ、旦那様？どうしたんでやす？」と心配そうに拙者を覗き込むご助じゃったが「な、何でもないわい！」と答え、口をつぐんだ拙者を納得顔で見ながら、あざけるように

「旦那様、物言えば唇寒し秋の風ってヤツですな？」としれッと言うのじゃった。



唇が痛くて喋れない拙者の上空をねぐらへ急ぐカラスが二羽　アホー　アホー　と鳴きながら西の空へと飛び去っていくのじゃった。

（おわり）